# 地域の絆

あの頃

時代とともに変わりゆくふるさとの姿

かつて、32世帯、150人が暮らしていた大虫地区。
肩を寄せ合い、助け合いながら生きてきた。
まちの中心地からは遠かったけれど、
家族のような強い絆と、温かさがそこにあった―。

写真1__昭和30年代、当時の大虫集会所で。若者も子どもも大勢が暮らしていた大虫。そこには温かい人の和があった。 写真2__昭和21年3月、助藤小学校の在校生。当時大虫から通う児童が最も多かったという。写真提供　小田政弘さん。 写真3__昭和59年9月、地区に少しでも賑わいを取り戻そうと小田さん、斉藤さんらが実行委員となり取り組んだ「第1回大虫ふるさと祭り」。子どもみこしや、手品、カラオケなどが催された。当時の大虫の戸数は13軒27人。まつりの参加者は約90人だった。 写真4__2回目の「ふる里祭り」は15年経過して開催。2回目からは、過疎化が進んだ故郷でこれまでに亡くなった人たちを追悼する法要を営んだ。写真は平成23年10月に開催した「第4回大虫ふる里祭り」。戸数は7軒8人と減り、参加者は61人。

## だからこそ、今、風を起こさないといけないのです―。

大虫では、斉藤、小田、川口など同じ名字が多いため、それぞれに名字のほかに「屋号」があり、その「屋号」で呼び合っていました。もちろん回覧版も「屋号」で回していました。それは、集落という大きな一つの家族のようでもありました。

大虫に住んでいる以上、助け合うことが生きるすべでした。「地域のことは地域で」それが当たり前のことでした。

田植えや稲刈りの時期には、「手間換え」といい、一つの田を総動員して手伝い、また、道が崩れれば、みんなで道を直す。当時、すぐ役場の人が来て、直してくれるわけではありません。昭和25年のキジヤ台風のときも土砂崩れが道をふさぎましたが、その時も住民総出で道を直しました。

そうした生活の中でも、大きな絆を感じたのは、人が亡くなったときでした。その頃は、どの地域にも火葬場があり、地元で葬儀をあげたものです。みんなが家族のような大虫地域。誰々の親戚はどこそこに住んでいるという情報は、みんな知っていました。電話のない当時、人が亡くなると、まず始めに行うのはその家の親戚への連絡でした。「お前は○○村、お前は○○村へ行け」と手分けして他の村まで歩いて伝えに行きました。

そうして親族が集まって初めて葬儀が行えたのです。他の場所で亡くなった時には、戸板に乗せて連れて帰りました。棺桶も地域の者が作り、二日がかりの火の番も交代で行うなど、亡くなってから墓に入れるまでが、地域の者の務めでした。

そうした葬儀は、新しく大きな火葬場ができる昭和40年代まで続いていました。

今、大虫の住人は5人。また、離れた者も年を取り、年々少なくなっています。そして平成22年を最後に夏祭りも途絶えました。

10年先の状況が見えない今だからこそ、当時の生活を知っている者が、何か風を起こさないといけないんです。

## 地域のつながりが濃い時代を生きた者どうし、心はつながっている。

昭和38年に大虫から
地御前に移り住んだ
おだ・まさひろ
小田　政弘さん（80歳）



## 誰もが、ふるさとで生活ができるのなら、そこから出ようとは思いません。

昭和37年に大虫から
宮内に移り住んだ
さいとう・やすし
斉藤　康さん（79歳）

父も山の仕事に従事していましたので、山での仕事に就くことは自然なことでした。

移動製材機が山の奥まで入り、伐採の現場で製材・加工し、半製品にして山から出していたこともあります。田畑では米や野菜を作り、家族で炭を焼く、そして冬の間は猟をして生活する。それで生活が十分成り立っていたんです。「山があれば大丈夫」。そんな言葉をみんなが口にした時代。わたしも山での仕事を広げることを夢見ていました。

それが、昭和30年代に入ると、急に山の仕事がなくなり始めました。２～３カ月先の仕事が見えない状況が続き、炭も市場価格が安くなり、だんだんと、生活できるだけの収入が得られなくなっていったのです。

集団就職するための若者を乗せた「就職列車」に代表されるように、都会や市街地では、労働力は貴重で、就職希望者数に比べて求人数はその数倍もありました。当時の廿日市も例外でなく、職業安定所に行けば次の日から仕事があるという状況。しかも、月の給料は山の仕事の倍ほどもあったのです。

みんな都会を求めて大虫をあとにしたわけではなく、生活をするための仕事を求めて街に出て行ったのです。

誰もが、ふるさとで生活が続けられるのなら、ふるさとを離れようとは思いません。大虫を離れて暮らす者の一人として、そうした時代の流れを誰も責められるものではないと思っています。

# 38豪雪（サンパチ）

忘れてはいけない事実がある。
高度成長の波に、さらに追い打ちをかけた豪雪。そのとき、集落の灯が消えた―。

## 中国地方を襲った未曽有（みぞう）の豪雪―

### 集落の灯を消した豪雪

昭和37年の年末からまとまって降り続いた雪は、翌38年2月まで止むことがなかった。鹿児島県でも積雪30㎝を記録するなど、日本列島を白く覆い尽くし、中国山地を中心に死者が200人を超える被害をもたらした。

旧佐伯町津田観測所では、37年に39㎝、38年には52㎝を観測し、近年まれにみる大雪だった。さらにこの年の気温は平年より低く、降雪のほとんどが溶けずに蓄積。大虫への交通は遮断され、しばらく陸の孤島と化した。海抜510mの助藤（すけとう）小学校では、6日間の休校となり、それより標高の高い大虫では、2m近くの積雪となった。

林業に依存していた大虫地区では、その間仕事がなく、街へ職を探しに出ざるを得なかった。そして、この豪雪を境に、若い人たちは広島市などの沿岸部に移り住みはじめ、人口流出は加速度を増した。

特に雪の被害の大きかった島根県匹見町広見地区では、自衛隊が除雪と生活物資の搬入のため出動。この豪雪を契機として離村者が激増した。町も集団移転を勧め、昭和45年、住民はすべて移転し、匹見町広見地域は無人の集落となった。